

TEACCH カンファレンス in 大阪参加報告 その1

府養研本部書記 藤岡聖典

この会は2004年2月7日(土)～2月8日(日)大阪郵便貯金ホール(メルパルクホール)にてTEACCHプログラム研究会15周年記念事業として催されました。府養研から取材を兼ねて参加しましたので、紹介させていただきます。ただし、数時間の話を記憶の範囲で簡単にまとめており、主観が入っている点をご了承ください。今回は1日目の講演の内容についての報告です。

講演はゲーリー・メジボブ教授(ノースカロライナ大学TEACCH部部長)による「TEACCHプログラムの現在と共有してきた価値体系(コア・バリュー)」とキャサリン・フェハティ先生(アッシュビルTEACCHセンター教育心理士)の「高機能自閉症の人たちへの支援」の2つでした。通訳が大変わかりやすく、英語が苦手な者にも楽しい講演でした。

ゲーリー・メジボブ教授の話はジョークやウィットに富み、わかりやすかったです。日本で初めてのキャンプ等の取り組みでは、TEACCHプログラムの構造化のわかりやすさが職種や文化の違いを越えて人を結びつけ、自閉症の子ども達も心配をよそに楽しんで参加できたそうです。アメリカで生まれたシステムでありながら、日本人の丁寧さや勤勉さがよりよく反映されてかえってなじむようだとおられました。大変な苦労や困難があっても、それを利点に変えてしまうような教授の姿勢がうかがえました。同じ立場で考え、理解することで本人や家族への敬意が生まれる、理解すると、どう支援すればいいかわかる、パーフェクトはなくても、常によりよいものを目指すことが大切と言っておられました。幻想を持たない理想主義、難しさを正しく理解した上で、将来に向けてプラス指向でいくことが大切ようです。



本家のノースカロライナの方では、低年齢での診断が可能になっており、精神障害やADHD、難聴などとの複雑な重複の場合の診断についても可能になってきています。さらに高機能自閉症も正しく診断されるようになり、全体のニーズが増えています。成人の人、就学前の援助プログラム、教科別プロジェクト、地域にでて就労するためのグループなど、様々なニーズにも取り組む必要

がでてきます。それらに取り組み、具体的に形になっている様子がスライドで紹介されました。共働きの両親のために、夜間グループが集まるという工夫もあるそうです。多様で難しいニーズが、その時点で自分たちの限界を越えていても、なんとか解決していこう、できないならできるシステムをつくろうという姿勢に感動しました。また、新しい事実を発見し、対応に生かすため、脳の機能と自閉症の関係についての研究のプロジェクトも始められています。意欲的です。

キャサリン・フェハティ先生は、高機能自閉症の人への支援として、まず、そこに行くとは何が起こるか、何ができるかわかる「構造化された指導」について述べられました。気持ちを静めるエリアについての重要性を述べ、具体的にすぐにできる方法もあわせて紹介されました。変化に弱い自閉症の人が安心できるように、スケジュールや絵や単語で「どれくらい、いつ終わる、次は」と示すことも構造化である、と言っておられました。

言葉で尋ねることも可能な高機能の人でも、その気持ちを正確に知るためには、紙に推定できる項目を書いて選択させたり、やりとりがスムーズになるようなチェックリストの活用も効果的なようです。簡単な絵にセリフをつけてやりとりするなどの方法も紹介されました。これらは、コンピューターでも代用することもできます。彼らが正



確な社会情報を理解できるように、そして、それをどう理解しているのか誤解していないか知るためにもそういった工夫は大切なようです。自閉症の人が自分の強みや弱みを知り、自閉症のことを肯定的に理解し、自尊心をもてるように、そして、できればそれが思春期までに取り組めるたら良いということでした。自閉症の人にとって楽しく、快適で意味のある社会的経験ができる取り組みをすること、周囲の人が自閉症を理解し、共感をもてるような啓発の話もなされました。

自閉症の子ども達は付き合っていくととても可愛く感じる、そう感じる人が世の中にもっと増えたらいいなあと心から思える会でした。

今回は2日目の実践報告の紹介をします。